京交山岳部報

No. 415　　'87　5月号

〔第1643回例会〕

灰縄・京丸・ボンジ

日　　時　5月9日(土)～10日(日)　集合　西大谷バス停付近　AM7:00

コ　ー　ス　京都東IC－浜松IC－R152－R362－気田－灰縄山△1436m－駐車点で幕営－京丸山△1469m…ボンジ山△1293m－駐車点－往路帰洛

担 当 者　OB　伊藤潤治(TEL 463－4936)

地　　図　佐久間(豊橋　2号)

〔第1644回例会〕　府県境シリーズ(62－2)

舞鶴　大谷山(488.5m)

日　　時　5月17日(日)　集合　壬生庁舎前　AM7:00

コ　ー　ス　京都－須知－舞鶴－大山…峠…大谷山…峠…大山(三等三角点)－水ケ浦…正面崎…水ケ浦－舞鶴－須知－京都

担 当 者　OB　津田　実(TEL 798)　高速　岡田茂久(TEL 2－3282)

備　　考　京都府－福井県境の最突端の岬。日本海に突きだした正面崎も訪ねます。
地図　青葉山

〔第1645回例会〕　奥美濃

花　房　山

日　　時　5月24日(日)　AM5:00　壬生集合

コ　ー　ス　壬生－名神東I.C－関ケ原I.C－津汲－小津…高地谷…花房山△1190(往路下山)

担 当 者　本局　大槻雅弘(TEL 722)

備　　考　権現山・花房山・雷倉と連なる小津の山を歩きたいと思います。
春の奥美濃へ入りませんか。

〔第１６４６回例会〕

日坂（点名）・乞食松・大白木山

日　　時　5月29日（土）～30日（日）　集合　京阪三条駅東口　AM 7:20

コ　ー　ス　京都東ＩＣ－関ケ原ＩＣ－久瀬村日坂…△８２１（横山）…徳山村塚泊

乞食松△９６３．９m…大白木山△１０８２．２m（冠山）塚泊

翌日は山村敏郎氏古稀寿記念山行へ合流

担　当　者　ＯＢ　伊藤潤治（TEL　463－4936）

〔第１６４７回例会〕　山村敏郎氏古稀お祝い登山

奥美濃の名峰　冠　山

日　　時　5月31日（日）　6時２０分　九条車庫 集合（時間厳守）

コ　ー　ス　京都東Ｉ．Ｃ－関ケ原Ｉ．Ｃ－揖斐川町－徳山村塚－冠峠…冠山１２５７m…

冠峠－福井県池田町－武生 I.C －米原Ｊ．Ｃ．Ｔ－京都東Ｉ．Ｃ

＊希望者には別途、釈迦嶺へご案内します。　1/5万図　「冠 山」

担　当　者　ＯＢ　津田　実（TEL　798）　錦林　田中忠久（TEL　885）

費　　用　記念品代　５００円、　交通費実費（家族は交通費のみ）

備　　考　２０年前（４２年４月）「山より酒が好きになってな…」そんな事を云って腰の重かった山村さんを二代目部長に引張り出して５年有余、立派に部長の重責を果されました。退職記念　蛇谷ケ峰（47.11.12）還暦記念　五蛇池山（52.5.4）とたいへん良い山にも登らしていただきました。そして本年、めでたく古稀をお迎えになりましたので、お祝い登山を奥美濃の名峰、冠山で挙行いたします。1人でも多くの部員の方々のご参加をお願いします。記念品のみご賛同の方は５００円です。

申込み〆切　２７日

〔第１６４８回例会〕

奥美濃・若丸山

日　　時　6月6日（土）～7日（日）　集合　壬生局前　PM 13:00

コ　ー　ス　京都東ＩＣ－関ケ原ＩＣ－揖斐川町－横山ダム－塚…若丸山　往路下山

塚－揖斐川町－関ケ原ＩＣ－京都東ＩＣ

担　当　者　吉田　武（TEL　311－0998）

備　　考　申込み〆切日　5月末日　　費用　3,000円

今月の集会

インドア　「国体山岳部門とは　（2）」　岡田茂久

5月　7日（木）　PM6:30　厚生会館４Ｆ大教室

6月の集会

インドア　「読図　（1）」　大倉寛治郎

6月10日（水）　PM6:30　厚生会館４Ｆ大教室（予定）

企画運営委員会

5月20日(水) PM6:00 厚生会館4F大教室

山声雪語

国体山岳競技所感

岡田茂久

登山はスポーツであるかと問われた場合、最近では一部の人を除いて多数の人がその通りと答えるであろう。それは調査票等に書き込む時「あなたはどんなスポーツをしていますか」との質問に「登山・スキー」と書くことでも容認されている。それでは他のスポーツと同様に競技会に出たことがありますか又は競技をしますかの問にはほとんどの人がいいえと答えることであろう。二つとも否定する人は「登山は趣味です」と答えるかもしれない。本来登山の本質はそういうもので純然たるスポーツと言い切るにはいささか抵抗を感じるものである。

しかし、今日において我々のような山岳団体が組織する府県単位の山岳連盟を下部組織とした日本山岳協会が、国民のスポーツの元締めである日本体育協会の構成組織に参加し、社会的にも登山はスポーツであると認識されるに至っている。そしてスポーツであるからには日本体育協会と文部省及び各都道府県が持ち回りで主催する国民体育大会においても、登山は当初公開競技であったのが今では天皇杯・皇后杯の得点種目の山岳競技として実施されるようになったのも当然の流れともいえよう。

国民体育大会の開催基準要項には、目的に「大会は、広く国民の間にスポーツを普及し、アマチュアリズムとスポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力の向上を図り、併せて地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与するとともに、国民生活を明るく豊かにしようとするものである」とうたっている。

登山を我々自身がスポーツであると納得し認識するかぎりには、この目的の精神を尊重し国民体育大会に協力するには決してやぶさかではない。しかし登山の競技化にはそれ以上にひっかかるものが登山を愛好するすべての者の心の中の一部を占めているのも事実である。

本来、登山は競うという性格のない行為である。それだけに山岳競技については過去いろいろと論議されてきたし今後もまた論議されていくであろう。しかし、競技であるかぎり勝ち負けを競う宿命を負う。判定も単純化され山岳競技は登山の本質とは似ても似つかぬものとなりつつある。そして各府県ともトレーニングや選手構成に勝つための、登山とは異質といえる対策がとられている。

又、こんな声も聞く。「国体で他の競技では一流の選手が出場するが、山岳競技では一流の登山家が出場しないでは無いか」いささか考えの基準が異るが町の素朴な声として聞く価値はある。

山岳競技も国体開催基準にうたう「大会は、国民の各層を対象とする体育・スポーツの祭典である」との性格は薄れ競技の為の一部の層のものとなっている。なんとか登山者全体の祭典となるよ

うな方法は無い無いものであろうか。

ともあれ、それでも来年６３年には二順目第４３回の国体が「新しい歴史に向かって走ろう」のテーマのもと京都で開催される。我々の山岳部はこの山岳競技の内の踏査競技に主として協力することになった。心にわだかまりがあろうとも山岳競技は登山の１ジャンルとして割り切り、組織の一員としてここまでくれば我々には〝やるしかない〟のである。部員各位の力添えを願う。

しかし、考えようによっては我々の長い登山人生の内で国民体育大会が京都で開催され、それにたずさわり協力出来るのは願ってもないことで、一生に一度の良い思い出となることであるともいえる。

本号の報告に山岳競技とはいかなるものか、どのように運営されるのか概要が紹介されている。ぜひ参照してください。

第１６２７回例会

先山・諭鶴羽山△608登頂記

津田　実

新年の集会で奥村さんから淡路島の山え行こうと、お誘いを受けふたつ返事で参加した。と云うのは、淡路島えは、もう忘れる程むかし、厚生会の渦潮見物に行っただけで淡路の山は全然登ったことがない。

山え行く日が近づくにつれ、地図を買ったり参考になる案内書はないかと書店をあさったり、楽しいものだ。然し、観光案内書ばかりで山の本がない。そこで例によって我が家の本箱をひっくり返して見る。

先づ、日本山名辞典、中高年の山で予備知識を得る。山え入いるときは必ずその地方の民俗を知っておくと楽しみが倍加する。

小生も若い頃はピークハンターで、峰々だけが目的で、そのようなことは、問題外であった。精神的、時間的にそのような余裕もなく只我武者羅に登っていたが、コレもトシか？

日本山名事典によれば、せんざん、先山（淡路富士・千光寺山・三上岳）
兵庫県洲本市、淡路島の中央部、洲本港の西北西５㎞、高さ４４８ｍ　津名丘陵の南部、多くの神話伝説をもつ淡路島第一の名山とある。

では、その神話の一つの概略を紹介しよう。

播州の漁師が猪を矢で射ち、あとを追って淡路に渡り、ここまで来たところ、胸に矢の刺った千手観音像を発見したその漁師は、出家してその千手観音をまつったとある。

ゆづりはさん、諭鶴羽山、（踰鶴山・譲葉山・弦弓葉山）　兵庫県三原郡南淡町と三原町との境・淡路島の南部・洲本港の南西１５㎞、高さ６０８ｍ、淡路島の最高峰とある。

諭鶴羽神社の起源は古く、第九代開化天皇の時代、ある狩人がイザナギ、イザナミ二神が鶴に乗っているのを見て矢を射った。鶴は東の峰へとび、それを追って頂上に登ると、かやの大木に日光、月光が現われ、「吾はイザナギ、イザナミである。国家安全、五穀成就のためこの山に留むなり。これより諭鶴権現と号す」と云はれた。狩人は罪を謝して一社を建て、庄司大夫と名を変え一生を神に仕えたとある。

その後隆盛を極めたが兵火にあい全山焼失した、とある。

フェリーを大磯港に捨てＲ２８号を南下すると右手に巨大な観音様が出現した高さ１０１．２ｍ、ニューヨークの自由の女神を８ｍも抜いて世界一とのことであるが、コンクリート製のためか、有難さが余りない。

先づは、先山千光寺へ向うが曇天のため景観零、お参りをすませ、寺の縁起に由来する一対の石造の猪が珍しい。此所迄来て手振らで帰るのは勿体ないと近くの三等三角点４２２．９ｍへ向うが直ぐ近くに電波塔のある関係か山中と思えぬ舗装路でこれ又、有難み半減、諭鶴羽山へ歩を進める。

洲本の海水浴場の一隅を借用して昼食をとる。参加者全員山では剛の者、アッと云う間にビラフ、ギョウザ、おまけにミソ汁まで付いている。客観的にその態様を見るならば、ルンペンの食事風景とうつるかも知れないが、我々は和洋折衷の豪華な食卓である。

ときも好し雨はやんで南空の一隅に雲の切れ目が見え、心なしか波の音も小さくなって来た。黒岩水仙郷のペンションに駒をとめ、一夜の宿を乞う。

当初小生は、黒岩より２時間かけて登るものと思いそのような用意をしていたが、山本から諭鶴羽神社迄車道があるとのこと、帰宅時間の関係上登山径を止むなく車道に変える仕儀となる。

友よ、　軟弱と云うこと勿れ。

社のうしろから森のなかを抜けると広い登山道に出る。それを左へ少し行くと右から下りて来る道を登って行く。右手に電波塔が２つ見えると山頂はすぐだ。一等三角点△諭鶴羽山６０８．３、標高少しでも淡路島（阿波路とも云はれる）の最高点である。山頂には、諭鶴羽神社の奥宮が鎮座しられ神域に付き不浄を禁ずとあった。奥宮の前の怪異な石像は、高神と大天狗だった。

案内書にあるとおり展望は素晴しいものだった。紀州の山々、四国の山々、海峡に浮ぶ白い橋梁が有名な鳴門大橋か、左手が沼島か、高田収さんが、中高年の山と云う本のなかで海に浮ぶ山からの眺めは最高だと書かれていられるが正にその通り、何時迄見ていても飽が来ない。高神様と大天狗様に捧げる御神酒を忘れて来たのが残念だ。　ウソー　自分が呑みたいんヤロー。

大鳴門橋を見て帰った。

（注）　高神とは、　高いところに居る神という程の意味、全国的に民間で云い伝えられる漠然たる信仰で、天狗と混同されることもある。

天狗とは、　深山に棲息するという相像上の怪物。人のかたちをし、顔赤く、鼻高く、翼があって神通力をもち、飛行自在で、羽団扇を持つという。　　広辞苑より

3月14日～15日

〔参加者〕　岡田茂久、吉田　武、吉田康一、奥村弘信、原田加津子、津田照子、津田　実
高田　収さんの中高年の山を参考にさせて戴きました。

第1628回例会

武士ヶ峯と高城山

伊　藤　潤　治

はじめに武士ヶ峯を予告で　峰、を使用したのは誤りでした。峯に訂正します。

速やかな目覚めで早発。予定通り走って、破線をもつ茄子原で尋ねた。案の定、期待にそむかぬうれしい答えをもらった。

茄子原からの破線路へ駐車地点の東から登って合流。舟原は急坂に開けた見晴のよい山里。きのうまでのなたね梅雨が嘘のような、朝日のまぶしさ。ところが道筋の家は、どこも不在。最高所に至っては、空屋であるなど、里人の話がきけなくて残念だった。

幹の墨書「辻ノ内山」から左へ尾根に上った。そこで、真向いの袖野山と左の竜王山に見とれる。やがて暗い植林に入ると、道のど真中に片屋根ながら堂々と、掛小屋、よき憩場である。それではと朝食にする。その傍らの幹には、「分山」の墨書があった。

小屋のつぶれがあって、矢ハヅ峠道だが、それを左にして、尾根を村界稜下に登る。道が十字に交叉する所に、番小屋風のかわいい掛小屋があった。左へ進んだが、すぐ村界を歩くことにした。ここの木々も退屈させない姿かたちで迎えてくれ、三月半ばであるのに冷風が気持よかった。いわく有り気な疎林になり、少し右へ奥めいて、保護石を東と南におき小祠のような風采で、奥山（矢ハヅ峠西）Ⅲ△1,007.5mはあった。のどかな木漏れ日の平は、あまり頂上らしくないぞ、そう思いながら矢ハヅ峠へ向うと膝にこたえる下りであったし、峠を過ぎて振り返った姿はうれしく見詰めなければならぬ、立派な一山になっていた。左へのトラバースと別れて、笹のまばらを登り詰めれば、めでたや武士ヶ峯。

目に飛びこんだのは、・1117m峰と・1035m峰の英姿。思わず天川村領に入り窪みを越えて遂に・1035mまで行った。そこを武士ヶ峯とした打標は意外であった。

とはいっても私たちも似た誤りをやっていた。それは不発に終っているが、1955年3月、第63回例会に武士ヶ峯を計画、それに掲げた標高は・1032m（新図1035m）。ちなみに当時の使用図を調べると、・1032mの位置は、武士ヶ峯の奥峰的存在に見えなくもないが、許されないだろう。書いた文には時効はなく、ついでながらここに第63回例会での思い違いを深く反省してこの標高を第1628回の如く訂正さしていただく。

・1035m峰も随分落着いたすがすがしい林相の上に、尾根伝いでは、高城山にはっとさせられる展望を供えており、この峰は、武士ヶ峯の特別大附録と賛えていいだろう。

かくて武士ケ峯は、初志以来３２年で好天を恵まれ念願がかない、萬々歳の昼食ができた。高城山に向う稜線は手入れの行届いた遊歩道状で調子がでた。あんまり心地よいので目がくらんだか、気がつくと脱線していた。一泡ふいて主稜に戻ってみると、すかっとした樹間に絨緞を敷いたような美略がある。これ程立派な道が白昼見えなかったのは、どうした事か。おかしくなって、ほいほいといって下っていくと、西之谷からの歩道と会う。これより木立の美景に囲まれたのぼり坂。眼を楽しませ、膝をいたわり、そろりそろりのうちに、高城山Ⅱ△１１１１ｍに上れた。樽は朽ち不憫にみえたが、これが画になる風景かも知れない。大普賢岳はきびしい姿をしていた。この頂きには１９７０年１月２５日、今西錦司、土倉九三、三木昭二の諸氏と登っており、本日は二度目のご縁である。下山は西之谷道の交叉に戻り矢ハヅ峠経由のつもりであったが、暖かそうな冬木立の林をながめている間に、川股への破線を下る気になっていた。この尾根もよかった、さんさんたる日を浴び、きょう歩いた山々に見つめられて、ご満悦の下降だった。持参図の余白部に「高城山、踏渉譜第２２」と参考記入。後の祭りながら帰宅して、ひもとくと、川股から矢ハヅ峠、奥山、武士ケ峯高城山、川股と扇状にお登りで、私は不覚にもこれを失念、惜しいことをしたがこのコース設定には、感服している。

〔参加者〕　伊藤潤治。

〔コースタイム〕　出発 5:50 ―茄子原 8:40…奥山 11:15 ～ 11:25…武士ケ峯 12:24 ～ 13:15…高城山 14:35 ～ 14:50…川股 16:40…茄子原 17:00 ―帰宅 20:20

地形図　山上ケ岳（和歌山３号）　　１９８７－３－１７

第１６２９回例会

蓮華温泉とスキーツァー

三　橋　　勉

３月連休スキーツアーの行先を信州に変更する。今井氏のマイカーで山科の台川氏宅を午前０時に出発し雨中を約７時間、残雪を求めてやってきた。雨はやんだが、山の上部はガスがかかっていたので今日は八方尾根でトレーニングする事にする。車を置かしてもらう民宿「ますや」で小憩ののち、宿の主人に車でゴンドラ入口まで送っていただく。ゴンドラ（アダム）に乗って兎平に到着し、リフトに乗り継いだが、強風のため途中で止って宙ブラリンとなる。その為か上部のリフトは運転休止であった。

早速滑走するべくゲレンデに出たが、あまり調子がよくない。雪質が悪いからとか道具が悪いからとか理由をつけているが結局、腕前が悪いからである。３時すぎにガスがかかって見透しが悪くなり引き上げて明日のために鋭気を養った。

翌朝はよく晴れたので気持ちよくタクシーで親の原まで出掛けた。多勢のスキーヤーがゴンドラ乗り場に並んでいたが８時に動きだすと、またたく間に順番がきて２０分で標高１５６５ｍ梅ノ森に

到着した。大槻貞従さんの友人、（平井氏）にあったので、彼が来られなかったことを伝えると残念がっておられた。

さあ登山準備をととのえて、いよいよ出発である。何故か私だけがシールを張って他の二人はカツイデ登る事になった。あまり踏まれていないコースであったので、歩行者組はだんだん遅れてきた。結局全員シールをつける事となる。連休なので登山者の多い林道をさけて、直登コースを登る事にした。早大ヒユッテのある神の田圃にて休憩する。こゝから少し登りがらくになり成城ヒユッテでまたもや休憩する。２年程前に同行させてもらった村上靴店の主人にあう。昨夜京都を出発し朝３時にこちらに着いたという事であい変らず多数のパーティであった。白馬岳をバックに写真をとってもらった。

これからいよいよ急な登りとなるわけであるが、昨年短かいシールでスリップしたので今年はスキーの板と同じ長さのシールでどれくらいの斜面まで登れるかテストをして見ようとハリキッテ出発する。昨年はテント持参で苦しい登りであったが、荷物が軽くてもやはり登りはしんどい。途中でパンを食べ元気を回復し登り出す。今年もヘリコプターで上ったスキーヤーが気持よく滑ってくる。中には、「キャー」という若いギャルの悲鳴も聞こえてきてにぎやかな事である。こちらはエッチラコッチラと荷物をかついで登っているのにエライ違いである。

やがて急登になるとやはりスリップするので、急登をさけて、ジグザグに登る事にした。トレースも斜めについている。雪がゆるんできたのでなるべくトレースの跡を登る方がらくである。

１２時すぎに天狗平に到着し、風をさけて岩陰で昼食とする。ときどきヘリコプターが低空で通過してすぐ近くまでスキーヤーを運んでいる。さあ我々もシールをはずして滑る時間となった。

昨年風吹尾根に滑ってしまったので今年こそ間違わずに行こうと乗鞍岳からのびてきている尾根とヘリポートとの間を進むと、赤い標識があった。その少し先は急に落ち込んでいたので右にまわり込んで谷に滑り込んだ。何と北斜面の為か素晴らしい雪質である。こんなよい雪であればよく廻ってくれる。この為に今まで苦労して登ってきたのである。こゝからふり返ると今まで立っていた場所は大きな雪庇になっていた。昨年は山靴で苦い経験をしたというお二人さんはスキー靴で快適に滑って行く。みるみるうちにおいてきぼりをくってしまった。それでも私はコースを綿密にカメラに収めるためゆっくり滑って行った。そうすると何度も通ったところが、思い出されてくるからふしぎである。途中一ケ所だけ広い雪原からせまい中ノ沢へ入る所以外は、間違わずに蓮華温泉まで無事滑り込む事ができた。夕日が雪倉岳を染めて美しく輝やいていた。

蓮華温泉は新館が建っていて収容力が増えていた。その半面お風呂が満員で入れないので、元湯へ台川氏とシールをつけて行く。約１０分スキーで登って行くと先着者が冷たくて入れないと教えてくれた。台川氏は何とかお湯を導き入れようと考えている。私は上部の湯へ行く。そこは熱くて入れないとの事で雪で冷やしているところであった。やっと入れるようになり早速ひと風呂浴びて戻ってくると台川氏はまだパイオニア精神を発揮していた。今日にはとても間にあいそうにないので、引き上げることにする。宿に戻り我々３名と大阪から来たという３人組との６名が同室となった。よく聞いて見ると京交山岳部と部報交換をしている好山好会の神田氏他２名という事であった。

夕食時に平井氏からメンタイコを差し入れしていただく。やっとお風呂もすいたので行くと、夜もふけて星空が美しかった。早速にわか講師となり、星空教室を開いた。冬のオリオン、カペラ、春の北斗七星が美しく輝やいていた。

翌日もよいお天気で、少しアイスバーンであったが早い目に出発する。今日は雪がよく締っていてツボ足でも歩く事ができた。

角小屋峠まで登ると朝日岳や赤男山につづいて雪倉岳がよく見えた。ところがいよいよ下山コースになると、標高が低くなってくるのと、天気がよすぎて雪質が悪くなり、だんだん重い雪となってきた。こゝで昨年も行き過ぎて戻ったが、ワサビ沢に入るせまい所のみ要注意個所である。あとはシュプールどおり滑って行けばよいのだが今年は気温が高くて、スキーがあまり滑ってくれなくて苦労した。おまけに木地屋でコーヒーを沸かしてのんでいる間に一列車遅れてしまい、相乗りタクシーでそのまま南小谷まで行くはめになった。そこでも時間的に列車がなく結局タクシーを乗り継いで白馬駅まで戻った。

今回のスキーツアーはメンバーのレベルが同じ位であったので、滑る方もアクシデントもなくスムーズに行き、おまけに久しぶりで八方尾根スキー場で滑べる事が出来てよかった。

〔同行者〕　今井勇一郎、　台川敦美、　三橋　勉

〔コースタイム〕

3／22　親の原 7:50 ―ゴンドラ 8:20 ―栂ノ森 8:40 ～ 9:00…成城ヒュッテ 10:30 ～ 10:50 …天狗原 12:00 ～ 13:15…蓮華温泉 15:00

3／23　蓮華温泉 6:45…ヤッホー平 7:45 ～ 8:05…角小屋峠 8:46 ～ 9:20…木地屋 10:50 ～ 11:15…大所 11:40 ～ 12:15（タクシー）―南小谷 12:50 ～ 13:05 ―白馬駅 13:25 ―昼食 14:35 ―朝日Ｉ．Ｃ 16:50 ―京都 20:10

第１６３０回例会

高田山・高尾山・太尾ノ嶺

伊　藤　潤　治

高田山は、山岳巡礼第３５号、１９８３年３月２３日刊と万葉乃舞台、朝日新聞１９８７年１月１６日によって心が動いた。

コースの内、南部町岩根は、山村敏郎さんから岩根でなく岩代であろうとご注意をいただいた。先づ岩根を岩代とご訂正いただきたい。この岩代にある有馬皇子（６４０～６５８）の「磐代の浜松が枝を引き結び　真幸くあれば　また還り見む、　巻２　１４１」に寄った。その歌碑はＲ４２号端の狭小地にあって、私には思いがけない、あまりにもわびしく見える存在であった。続いて高田山も岩代からと、東岩代に入って登路を尋ねた。その人は、登路は南部からであるという。しかし地形図田辺には林道があり、気に入らぬ返事である。道はなくても果樹園記号の斜面だから、必らず

歩けると思い、なお進み、今度はこの車なら山頂まで行けると保証していただく。こういわれて思い出したのは、1984年2月紀州竜門山で、今日と同じ教わり方で入って行って、狭い曲路のため脱輪の危険が連続した揚句に、岩角でタイヤを切りにっちもさっちもならぬ失敗に遭ったことである。だが、注意して深入りさえしなければよかろうと、性懲りもなく山ヒダを巡る山坂道を、右上に峰頭のある乗越しに駆け上った。ここだと思ったが、そこにもその先にも展望だけで△はなかった。間の抜けたことだがここに至って、山岳巡礼を参照すると、「高い櫓があり西を除いて展望よい」であり、引返す折、離れて向うに秀峰が見え本峰はまだであることが分った。林道は続いていたがそのまま歩く。梅林上のイバラ薮を抜けると、ぱっと、また梅林を前にして、測量棒を立てた高田山222mの二等三角点があった。既に雨衣不用の雨になっていて、太尾ノ嶺（ぶとんとのみね）はガスに包まれていたが、南部湾や田辺の山は美しく見晴らされた。来る4月5日は、南部の学童たちもここに登山するそうだ。彼等もこの光景に、きっと感動することだろう。

太尾ノ嶺は、日本山嶽志に、紀伊国西牟婁郡ノ北方ニアリ、富里村大字下川下ヨリ一里ニシテ其山頂ニ達ス、全山第三紀層ヨリ成ル、標高凡二千尺。と収録されていて、この山名、ぶとんとのみねも、点名、あいがこうも響きの愉快な好もしい名称である。従って太尾ノ嶺は、愛賀合からピストンの予定で高田山を下山して愛賀合に着くと、そこの人は、工事中の林道を、頼めば通してくれるから車で上れと勧めて下さり、また工事地点の先は、立派な道路が保平（ほうだいら）へ通じていて、太尾ノ嶺登頂のあとは、そちらへ抜けて行くよう教えてもらった。またまたこういう次第で黒ノ峠へ上ったのであった。峠には石仏と新しい無鍵の小屋があった。今夜はこの結構な小屋を拝借して泊りたいと思った。峠から尾根を登ったが様子が違う。その筈である。南北を錯覚、黒ノ森山をさまよっていたのであった。朝から走行に励むばかりであったので、峠の小屋に戻って寛ろぐ。そこで地形図をながめている内に、峠の向うでルートのにおいがしてきた。下って行くと果たせる哉、人工美林をたどるポールが点在、積った杉葉を踏む所々で、石畳道が現れ参道的なちょっと深奥境を感じさせた。稜線に上りつくと、その名にたがわず、ぶとい尾根筋、左折した先に思惟に余念なきふくよかでにおうような頂きが、Ⅲ△725mとNHKアンテナを置いていた。太尾ノ嶺も思わぬ進展で、めでたく登頂できたが、不調の身であってもこの分では物足りなかったのと、天気が悪く安全のためにも、高尾山に近づいておくべしと、保平、深谷トンネル、朝来を経て岩内に下山。岩内で高尾山の登路を教わった通り進むのだが、ドジを二度も踏む。ここも果樹園の山であって、慎重に高雄山栗園まで上り、ほっとして天幕を張った。そこから田辺の夜景は、まだ穏やかで美しかった。けれど20時頃から天幕は風雨にたたかれて、にぎやかな一夜になった。夜が明けても風雨は衰ろえる様子もなく、昨日は大蛇山△511mにも登れるつもりであったが、高尾山だけで家路につくべきであると思った。

この高尾山も、隠尾山（高尾山）紀伊国西牟婁郡ノ北西方ニアリ、上秋津村ヨリ三十町ニシテ其山頂ニ達ス、全山中生層ヨリ成ル、標高二千十尺。で日本山嶽志の山である。歩いて25分。高雄山経塚記念塔　昭和11年4月20日建と、Ⅲ△605.9mのある頂きに立ったが、激しい風雨が横なぐりに吹きしぶく何とも壮烈な情景であった。風影のガスの内からウグイスの美声、これは心

が和んだ。果樹園も無事に通り、岩代の結び松には、わが至福に感謝を新たにする。ちなみに結び松について、折口信夫は、「ここは崖になっており、明治前までは崖下を道は通っていた。また、結び松は、道の神に旅の無事を祈った。当時の　術的風習がうかがえる」と述べている。私は随分あちこち走り廻ってきたが、まだ、道の神に旅の無事を祈ったことがない。遅蒔きながらこの結び松に私は、アクセルを踏む度に、旅の無事を祈ること誓った。このあと海南市の藤白神社の有馬皇子遺蹟をたずね、和歌山市から向後の参考にとＲ２４号を帰った。本行は道路の開発と車のおかげの、まったくありがたく楽しい旅であった。

〔コースタイム〕

3／23　5:20出発ー紀ノ川ＳＡ 7:38 ー 8:15結び松 9:55 ～ 10:15…高田山 10:30 ～ 11:40…黒ノ峠 13:33 ～ 14:35…太尾ノ嶺 15:03 ～ 15:15…高雄山栗園 18:25

3／24　6:10…高尾山 6:35 ～ 6:40…栗園 7:05 ー藤白神社 9:50 ～ 10:15 ーＲ２４号 10:38 ー五条 12:25 ー帰宅 15:50

地形図　栗栖川、田辺。

〔参加者〕　伊藤潤治

1987．4．6

第１６３１回例会

鈴鹿山脈

宮妻峡から水沢岳・鎌ヶ岳

森　本　清　一

６２．３．２７

早春の鈴鹿山系の山に登ろうと云うことで、朝7：30分三条京阪前で待合わせる。時間通り吉田さんのワゴン車に、伊藤先輩、大倉さんのメンバーが到着。今日は前記の3人と私で4人のパーテーとなる。名神高速、1号線、東名阪道路と乗りついで、三重県側の宮妻峡に着いたのはＡＭ 10：00宮妻峡キャンプ場上流のカズラ谷分岐点に車を止めて、早速登山準備にかかる。入道ケ岳の下まで延びている林道を歩く。約３０分も歩いただろうか、中谷の林道のカーブ地点で黒い大きなカタマリの様なものが動く。最初は野犬かなと思ったが野犬にしては大きすぎる。良く見ると、メスのカモシカが一頭ユウユウと歩いている。こんな林道でカモシカが見られたとは、幸運というか、何んとも本当の自然に出逢った感じがした。カモシカの方でも我々に気づいて足早やに林道下の沢へと姿を消した。林道と水沢峠への分岐で小休止、ここから水沢峠までの登りは、かなりのアルバイト峠までの一時間ばかりの距離には途中岩に張りついたツララの結晶や、樹氷の様に下がるツララの自然の花を楽しみながら峠に着く。水沢岳まで後一頑張り、頂上までの道は熊笹が背丈程伸びていて、かきわけかきわけの連続、ＡＭ１２：００にやっと水沢岳に到着、早速昼食を食べる。三角点付近では熊笹のため余り眺望はきかなかったが熊笹が丁度良い風よけになって…今日は頂上で風がき

つかった…ゆっくりと昼食が出来た。昼からは今日のハイライト鎌尾根から鎌ケ岳への尾根歩き、水沢岳からの下りは大変勾配がきつくそこに雪が残り足元はすべるは大変な悪戦苦闘を重ねながら鎌尾根に取りつく、ここからは鎌尾根のアップダウンの繰り返しでピークを六つばかり越える。途中のピークで大変見通しの良いピークに出る３６０度の大パノラマ最高の気分を満喫して鎌ケ岳に向う鎌尾根はカニの横バイやロープ・クサリなどが途中にあり面白い尾根筋だった。鎌ケ岳に到着したのは、ＰＭ３：３０、頂上からは御在所岳、入道岳、雨乞岳、綿向山などを眺めながら乾杯、鈴鹿山系の山々を心ゆくまで満喫して下山は鎌ケ岳からブナの原生林を抜け、カズラ谷から宮妻峡キャンプ場に下山した。ＰＭ５：００出発往路を京都へ帰った。今日の山行きは自然のカモシカにもお目にかかれ、うららかな春の日差しにめぐまれて、早春の山行きとしては最高だった。

〔参加者〕　吉田、　大倉、　森本、　ＯＢ　伊藤

〔コースタイム〕

三条京阪 7:25 ―京都東Ｉ.Ｃ 7:38 ―栗東Ｉ.Ｃ 7:55 ―鈴鹿Ｉ.Ｃ 9:20 ―鎌ケ岳登山口（カズラ谷）9:53 ～ 10:10…水沢峠登山口 10:45 ～ 10:53…水沢峠 11:45…水沢岳（宮越岳）三等 12:12 ～ 12:55…岳峠 14:40…鎌ガ岳 14:55 ～ 15:25…雲母峰分岐 15:50…カズラ谷登山口 16:45 ～ 17:00 ―東山三条 19:45　（記録　大倉寛治郎）

第１６３２回例会　府県境の山シリーズ（６２―１７）

明神ヶ岳△～黒柄岳△報告

津田　実

国境シリーズも別の例会が多く出されて、小さくなっている仕末。でも此れを出すと必ずといってもよい、参加者があって結構なんとか維持していける。担当者としては、嬉しい限りだ。

今回もＯＢを初め常連？（エライスンマヘン）を含めて総勢１０名。２台の車で出発進行。亀岡より高槻に抜ける街道を南下。この道は有名なダンプ街道と聞いていた。「道路が隘く、悪名高いダンプが我もの顔で横行する。」と、然し休日のためか、豪傑の勇姿に見参することなく、杉生トンネルを抜けて樫船神社の下に車を止める。

古代亀岡は広大な沼で、そこに浮べる木舟をこの山中から造り出された。と語りつがれている。先づ、その結構なお宮におまいりして、登山の安全をお祈りする。

樫船神社とは、我が非才の知る由もない一風変った建築用式で、本体の上に又、屋根がある。いうならば、屋上、屋を重ねる、不思議な建て方であった。いづれ回を改めて土地の古老に聞いて見よう。

Ｉ　明神ケ岳

登山道は、その神社の右手から池を左に谷間を進み送電線の鉄塔を送り急な登りを落葉を踏みしめて上って行く。稜線にでて左へ、(右は枯枝で塞がれている。）山村さんを先頭にどんどん歩いていくと径の右手に少し林の疎らなところがあり、その真中に立っていた。付近の雑木に、どこかの

山岳会の記念に付けた木札が吊してあった。明神ケ岳△523.5m　先づは目出たい。伊藤大先達膝の不調にもめげず快調に登って来られたその闘魂に敬意を表し万歳の音頭をとって歓く。

Ⅱ　黒　柄　岳

樫船神社より駒を田能の集落に進め、経塔の横を通ると墓地に出る、その向うは広い谷間で今は休んでいる田圃があった。その農道を村人に教えられて竹藪を抜けると狭い乍らも踏み固められた道を登って行くと峠へ出た。勝手坂と云うらしい。

地図を見ると東別院付近の集落へ通じている、生活道路であったのだろうが交通機関の変遷から人が通らなくて久しい。

峠から右手の国境尾根を登って行く。疎林の中の静かな山旅を期待していたが山中で何か工事をしているらしく、凄ましい轟音が頭から引っ切り無しに落下して、何か工場現場に居るようで興味半減、然し、天は我に味方したか、轟音に追はれて疲れを忘れ、アッと云う間にパラボラに通じる林道に出た。

林道の側壁にセメントを吹き付ける作業中であった。側壁をクライマーの如く身軽るに移動していられる作業員の方々に敬意を表す。地図では、パラボラの右手に三角点が記されているが、フェンスで囲まれて入れない。

困ったことだと思い乍ら右手ばかり注意していたら、何んと左手の林の中に赤白の旗が風に揺れているではないか。此の旗を見付けて呉れた山村先輩に万才。

小雨を避けて樹林の中で昼食をとる。各自思いおもいの場所に陣取り、ＥＰＩの燃焼音と共に色々な異臭が付近に漂う。山の住人もさぞ驚いていることだろう。

巻寿司、玉子焼、ギョウザ、ラーメン、うどん、なかでも群を抜いての珍味は部長即製の蒟蒻のステーキ、余輩還暦にして初めて食す此の珍料理、缶ビール片手にこのケッタイな物を恐る恐る口にはこぶ。何んとも云えぬヘンな味。

部長宣う「おとうさん、うまいやろ、こんなエエモン、一寸そこらでクエヘンデー」　恐れ入りました。実は、今日の昼食の材料の仕入れを失念!!　「忘れたのではありませんぞー!!」

田能の村で一軒しかないナンデモ屋へとび込んだのは好いが、冷凍食品はないと断わられ、手ぶらで帰えレンと仕入れたのが此の珍品、此れが真相であります。

兎に角、此の珍ナルモノを食して身体の砂をくだした一行は勇気百倍、誰云うとなく、「此の儘帰えるのは勿体ない、ポンポン山へ行こう。」「いや、それやったら釈迦も行かなアカン」「其処迄行くのんやったら小塩山にカタクリの花の群落がある。俺が案内したるサカイ其処え行こう」どうもクスリがキキ過ぎた。「工事中、向日町へは抜けられません」の標識を好く読むと、小さく4月1日より」　そんなら行けると猛進、狭い悪路もなんのその、忽のうちに杉谷に到着、あとの二山も登って仕舞った。

小生が以前行ったときにあった？釈迦岳の三角点標石は消失していた。むかし、石の坐像のお釈迦様が鎮座されていた。それで釈迦岳と云う。と何かの本に載っていたのを思い出す。景観頗る好し、これも弥陀の慈悲か。

ポンポン山が、加茂勢(カモセ)山と伝り、神峯寺(カブジヤマ)山、又、かもじ嶽とも云われると、名所図絵に記されていると案内書に出ていたが、我が不明を恥じ入る。

点標石は角が破損していてセメントで補修してあったが、これは戴けません。然し、遙か彼方に今日登った山々が霞のむかうに見え、言知れぬ充実感がみなぎる。

丹波の山々よ　永遠なれ、　　岳人に　栄光あれ。　　3月29日

（註）「蒟蒻のステーキ」とは、　蒟蒻のコゲタものでありまして、何んとも云えぬ、結構な、お味でしたことを申し添えます。

〔参加者〕　岡田、山村、伊藤、奥村、三橋、方山、和田、津田

ゲスト参加（阪急　2名）

〔コースタイム〕

8:40 みぶ－9:30 樫舟神社…10:00～10:10 明神ケ岳…10:40 車止－11:10 田熊…11:30 勝手坂…12:00～13:05 黒柄岳…13:50 車止－14:25 杉谷…14:50 釈迦岳…15:26～15:45 ポンポン山…16:15 車止－みぶ 17:05

薩南の硫黄島から屋久島へ

坂　井　久　光

3／1　友人の福本と二人で大阪南港からサンフラワー号に乗り、3／2　10時頃志布志港へ上陸。バスで鹿児島市天文館バス亭で下車。なじみの四季で昼食をとり、三島村役場へ行き資料を頂き桜島桟橋へ行きフェリーで桜島に行き、国民宿舎に一泊。翌3／3　名山桟橋に行き三島村営汽船三島号に乗り桜島を後に、佐田岬や開聞岳を眺めて竹島港に依り硫黄島へ。船に鹿児島テレビの一行もいた。港のすぐ前の本田荘で二泊。安徳帝陵や平資盛始め平家一族の墓地を詣り、寿永の昔を偲んだ。次いでKTVの一行と俊寛墓を詣りで、若年37才に永眠した英僧の無念を察した。次いで坂本温泉へ峠を越えて裏海岸へ行き、立派な無人宿泊所があり防波堤内に湧泉があったが、泉源がつまったせいか低温で入浴出来ず引返して硫黄岳の麓の東温泉へ向った。

海岸に立派な浴槽が作られ近くに小屋もあり、東支那海の怒濤を間近に眺める海岸の露天風呂で手前の浴槽は燃くて入れず、奥の浴槽へ二人で入浴し旅の疲れを医し浮世の苦労が忘れる思いであった。旅荘へ海岸の林道を通ったが中間が工事中で手前で崖上から山羊が一頭駈け下りて竹藪に消えた。此の島唯一の大型獣であろう。

旅荘に1.5m　38.5Kのクエの魚拓があった。夕食は新鮮な魚の幸が盛沢山であった。硫黄島（いおうじま）は昨年訪れた黒島と竹島の三島の中間にあり硫黄カルデラの中央火丘で、竹島や黒島は外輪山の一角が残存したもので、九州の四大カルデラの一で硫黄岳は今尚噴煙を上げる霧島火山脈の一活火山であり、港に鉄や硫黄を湧出させていて黄褐色に海水が濁り、黄海島(きかいじま)と昔は云った

のが鬼界ケ島と宛字されたので俊寛僧の島流しになった島であり、寿永の昔壇の浦で二位の尼に抱かれて亡くなられた安徳帝は、実は身代りで、平家の大将資盛以下の一党と船で此の島へ逃れ、黒木の御所に住まわれたその子孫が長浜家で、当主は南島オパールＫＫの社長となり３３代目で、系図も三種の神器もあるそうで、古い墓石を見るにつけても真実性が感じられた。

又、昭和４８年ヤマハがリクエーション施設として、ホテル足摺や飛行場を開設、ホテルに５０羽の孔雀を放し飼いしたのが逃出して島内で野生化繁殖して畑作を荒したりするので、島民が捕へて小学校の裏の墓地に飼育しているが、野生の仲間が網越しに毎日面会？に来ているとか。昔は砂糖キビの耕作が行はれたが今はなく、つわぶきや女竹の筍が主な産物で、飛行場も足摺も今は休業閉鎖中である。

翌３／４　登山口迄主人本田氏に送ってもらい、硫黄岳へ長い林道を登った。登るにつれ展望が開け、飛行場や港が眼下に見え、遠く屋久島や口之永良部島も見えた。山頂近くの林道終点附近は硫気孔が多く盛んに亜硫酸ガスを噴出しており、その間を通るのは息が苦しかった。

山頂に黒石の一等三角点７０３ｍがあり、二人で万才三唱。小憩後下山。山麓の東温泉で汗を流し、稲村山の山裾を通る林道を通り、お社を参り、ホテル足摺を訪れた。孔雀が散歩道や林道を走る姿が見えたがカメラに撮れず残念であった。芝生の庭園や美しい宿館があり淋しい感じがした。次いで軽之大臣の墓があり、遣唐使に長安へ渡り、父が悪者に毒薬を飲まされ、唖になった父をその指を切って血で書いた和歌で父と知り日本へ連れて帰ったが難破してこの島へ流着き、この地で父が亡くなったのを墓にしたとの一悲話が木標に印してあった。次いで小学校裏の孔雀飼育所へ行き、姿を認めて松の木へ飛上った野性の仲間をカメラで捉へた。中には１０数羽の孔雀がいた。

又、その後島の役場に行き資料として「あゝ　北山王国」二千円を買って土産とした。それに依るとこの著者は三島秘史を元に平家の後裔達の行動を推定を混へて書いている。安徳帝を奉じてこの島に来た資盛を将とする一党は帝に忠誠を尽し、後薩南各島に分れたが、毎年貢物を送り、奄美大島や沖之永良部島やトカラ列島から沖縄に迄勢力を延ばし、北山王国（昔時沖縄は北・中・南山三方立していた）を作ったと書いてあり、安徳帝の子孫長浜氏の事も詳しい。

３／５　鹿児島へ戻り、福本が身体の調子もよくないので帰り一人で桟橋近くの宿で一泊して、翌６日屋久島へ。モッチョム岳へ登り日が暮れて尾間国民宿舎へ行き一泊。翌日雨で宮の浦へ戻り民宿岳杉で一泊して、翌７日志戸子岳へタクシーで宮の浦林道を約１１Ｋｍ走り、登山口の登り口を発見。１２時に迎へに来るよう頼んで支尾根の小道を登ったが、右折する分岐点が樹林で山腹を巻いており判らず、行き過ぎ谷川が前面に見えるので振り返って樹間からジャンクションピークが見え元へ戻り一峰を越え右を東に踏跡を辿った。道は山腹を巻いたり小ピークを越えたりして鞍部に着いた。こゝにヌタ場があり向きを南へ変へた。可成高度を稼いだと思ったがそれから稜線の左側を巻いたり尾根を辿ったり屋久杉の洞門をくぐったりして常緑広葉樹林の山腹を登りつめ山頂と思しき所に出たが、その先に頂上が見えたがすでに遅く１０時４０分になっていたので運転手が心配すると思ってルートは判ったので、又来年の楽しみに残しておこうと決断して、後２０分もあれば往復出来たのに引き返すことにした。途中あわてたので支尾根に下ることもあり、運転手の待つ登

山口の林道に出たのは１２時４０分で、４０分の遅刻でその分待時間運賃ざっと３千円程支払い、１３時の出港に間に合わず、又旅館に戻り一泊して翌日の汽船で鹿児島へ夕刻着いて、汽車で１０日の朝に帰宅し山旅を終へた。

音羽山から宇治まで

川　原　傳　治

６２年3月１９日

久しぶりの山行である。そして久しぶりの投稿である。今回は、以前から国鉄に乗ると一度登ってみたいと思っていた山科の東の山、音羽山、千頭岳、それによく行っていた南の炭山から宇治までの少々長めのコースを一気に通して行くことにした。これも久しぶりに井上氏と２人で歩いた。

まず、近鉄向島に９時に集合し、近鉄、京阪と乗り継いで、京阪大谷着１０時１０分、いよいよここから登りに入る。東海自然歩道をぐんぐん登る。久しぶりで息が切れてしかたがない。道中の２人の話といえば、互いの子供の事、以前の山行のこと。最近は子供の健康だとか家事のことが中心で、その事の裏がえしに、北アルプスや利尻の事が夢のように思えてならない。〝我々は、かって山男だったのか〟と。

このような会話を続けながら、１１時１５分に音羽山に着く。琵琶湖を右に、左に京都市内、遠く比良の山々が一望できた。なにかなつかしさも感じる。南にこの先の千頭岳が見えていた。昨年１２月の納山会では、留守番をしていて登れなかった山である。少々腹がへってきたが、千頭で昼食を取ることにして先を急ぐ。途中で東海自然歩道と分れる。

アップダウンを繰りかえし、そして、あいも変わらない話題を荷物に先を急ぐ。１２時２５分西千頭岳到着。頂上の三角点を確認し、昼食を取る。西を見ると下に我々の住む伏見が見える。宇治川の近鉄の鉄橋が目印となっている。

ここまでが山登りというか、前半の登りはほぼ終った。１２時５０分出発。ゴルフ場の横をぬけアスファルトの道路をかなり進み、道路の横を登ると上醍醐の寺に１時５０分に着く。山の上の寺を尋ねるといつも思うことだが、古えの人々の心意気というか信仰心の深さにはおどろく。山の上によくこんな建物を建てたものだ。

ここから上炭山までの下りは、２人とも初めてで、水晶谷という谷を下る。いったんこの谷を下ると、宇治までいくしかない。他のコースは峠を越えることになる。足もいたくなってくるし、このあたりから少々弱音が出てくる。水晶谷を下ると宇治まで１０Kmの表示がある。久しぶりにしてはハードになってきたと２人とも感じはじめる。全コースで２０Km近くになっているはずだ。東海自然歩道に再び入る。

上炭山～炭山と通りぬけ、途中京滋バイパスの工事現場をさがしながら歩くが、みつからなかっ

た。トンネルでぬけているらしい。そうこうして、くたくたになって志津川の集落に着く。もう少しで京阪宇治である。このころから雨がパラパラしはじめる。スベリ込みセーフとはこのことが。4時３０分頃駅前に着く。足がかなり痛くなっていた。茶店で休んで帰ることにする。

ハードもハードである。２０Km近くを一気に歩いたのである。このような山行を続けることが、アルプスへ再びということになるのだと思った。井上さん、またよろしく、ということで山行記とする。

〔参加者〕　川原傳治、　井上一夫

木曽御岳

吉田　武

６２年３月１９日～３月２１日

昨年の２月に王滝頂上まで行きながら剣ケ峰に行けなかったくやしさを思いながら…五合目の駐車場で朝を迎えた。昨夜からの雨がまだ降り続いているが、天気予報を信じてまつ事にした。ＡＭ８時頃から雨もやみ我々もテントを張るようにした。スキー場に行くまでの林にテントを張った。遅まきながら朝食をして五合目から三笠山までリフトを使って登り、明日登頂するために田ノ原のコースを偵察した。

２１日　6時起床してリフトを使って三笠山直下の第７休憩所前に８時３０分ついた。昨日偵察した通り田ノ原まで１０分たらずでついた。王滝頂上と剣ケ峰が良く見え、後には木曽駒を最高峰に中央アルプスが全域見渡せた。七合目から鳥居のうまった所までダラダラと登る。鳥居からコースを右にとり林を抜けて小さな谷を約２００m程登って八合目のイノシシの置物より少し下部についた。この辺あたりから斜度もきつくなってきて僕の使用している旧式のシールではスリップが多くなってトラバースもままならなくなった。八合半位の場所にスキーをデポする。アイゼンをはいて王滝小屋へ直登する。１１時５０分に王滝頂上についたが、そのまま正面に見える剣ケ峰に向って登った。噴煙が左側から流れてくるので早々にサイの河原を通過して約３０分程で剣ケ峰についた。御岳全域を見渡せ、遠くは北アが真白に輝いていた。地図を見ながら三角点を探したが３０cm程氷が張っているためピッケルで掘ってもなかなか見つからなかった。

木曽谷にガスが上昇して来たので下山する事にした。王滝小屋まで１０分程でそこからは尻セードで快適に下る。スキーで下るより安全で楽しい、デポ地点からは上りに使った谷を滑る、トレースがあるので鳥居まではすんなりとついた。ここからは田ノ原まで直線コースでゆるんだ雪面を直滑降で下った。三笠山休憩所についた時は満足感で胸がいっぱいだった。

〔参加者〕　吉田　武、　大倉寛治郎

例　会　報　告

例会No.	目的地	月　日	天候	担当者	参加者	記事
1625	（中止） スキー登山 位　山	3月　7日 ～9日		吉田　武		
1626	（延期） コド石	3月　3日		伊藤　潤治		
1627	淡路島 先　山 諭鶴羽山	3月14日 ～15日		奥村　弘信 原田加津子、 （吉田康一）	岡田　茂久 吉田　武 津田　実 （津田照子）	（別稿詳報）
1628	武士ケ峯 高城山	（変更） 3月17日		伊藤　潤治		（別稿詳報）
1629	（変更） 蓮華温泉 スキーツアー	3月20日 ～22日	雨のち晴	（変更） 三橋　勉	今井勇一郎 台川　敦美	夜の露天風呂で星空を眺めてゴキゲンサンでした。 （別稿詳報）
1630	高田山・ 高尾山・ 太尾ノ嶺	3月23日 ～24日		伊藤　潤治		（別稿詳報）
1631	鎌ケ岳	3月27日	晴	大倉寛治郎	伊藤　潤治 吉田　武 森本　清一	宮妻峡のカズラ谷に出合に車を止め、水沢峠（水沢岳・宮越山）より鎌尾根～鎌ケ岳から往路カズラ谷のコースで残雪の残る中、十指に余る小さなピークを越え、カニの横ばいやカレバをこえ、スリルと展望を大いに楽しみ、たいぼうの山行が出来ました。（別稿詳報）
1632	府県境 シリーズ 明神ケ岳 黒柄岳	3月29日		津田　実 三橋　勉、 方山　宗子、 伊藤　潤治	岡田　茂久 山村　敏郎 奥村　弘信 和田　良一 （他　2名）	（別稿詳報）

1633	額井岳と 戒場山	4月　5日	晴	岡田　茂久 田中　忠久 大倉寛治郎 方山　宗子、渡辺　智生 原田加津子、鷲見　敏一 吉田　武、（家族　3） 河合　秀晃、大槻　貞從 井戸　澄夫、（大倉[illegible]子） 以上　20名	伊藤　潤治 山村　敏郎 奥村　弘信 津田　実 渡辺　明子	久しぶりの晴天に恵まれ、額井岳での津田実氏還暦記念登山は大人18名、子供2名の多くの参加を頂き、山頂でのセレモニーも盛大に行う事が出来ました。戒場山から戒場寺、そして山部赤人の墓とめぐり、桜には少し早かったが、[illegible]原にて、4時40分解散まで楽[illegible]一日を過す事が出来ました。 （別稿詳報）

部　員　動　静

目的地	月　日	天候	参加者	記　事
天上ケ岳 △3	2月21日	晴	坂井　久光	箕面の滝の上の三角点
硫黄岳△1 志戸子岳 △1	3月1日 ～10日		坂井　久光 福本	鹿児島の南の旧鬼界ケ島　別紙記載
浜石岳△2 大山△3	3月22日 ～26日		坂井　久光	深日クラブと浜石岳へ、1人で大山
愛宕山	4月　2日		大倉寛治郎 久保　忠三	高尾…神護寺…首無…愛宕山
八ケ峰△2	4月4日～ 5日		JAC京都 支部	
烏帽子岳△2 銭壺山△2 弥仙（厳島）	4月　7日 4月　8日 4月　8日			山口県の下松市近郊の山 柳井市近くの山 宮島の最高点

雑　報

4月の集会

9日　場所　厚生会館4F大教室

出席者　本局　三橋、大槻雅、古市、大木、井上、方山　高速　岡田　九条　和田
OB　津田、坂井、伊藤　梅津　吉田　烏丸　大倉　以上　13名

インドア　「国体山岳部門とは　（１）」　　岡　田　茂　久

二順目国民体育大会、昭和６３年の第４３回京都大会（新しい歴史に向かって走ろう）に望み、新しく改正された国体の山岳競技とはどのようなものなのか競技日程を含めて理解して頂くための概要です。

（２）の日程及びコースで　Ｓは踏査競技　Ｔは縦走競技　Ｒは登攀競技です。

山岳競技とは（競技の内容）

山岳競技は、国民体育大会の正式競技として、財団法人日本体育協会に加盟している日山協が制定した登山の競技で、国体開催県の山岳地帯で日山協が認めた競技会場を使用して開催されます。

（１）　競技種別・種目・参加者数

参加する種別（４種別）	実施する種目（3種目）	参加するチーム数と人員 監督	選手	チーム数	計	合計	選出方法
成年男子（満１８歳以上の男子）	縦走 登攀 踏査	1	3	46	184名		沖縄を除く各都道府県予選により選出された都道府県単位のチーム
少年男子（満１８歳未満の男子）	縦走 踏査	1	3	15	60名	368名	各ブロック大会により選出された都道府県単位のチーム。 但し開催県は、１チーム出場。
成年女子（満１８歳以上の女子）	縦走 登攀 踏査	1	3	15	60名		
少年女子（満１８歳未満の女子）	縦走 踏査	1	3	16	64名		

・成年男子は、４６都道府県から各１チームずつ参加します。

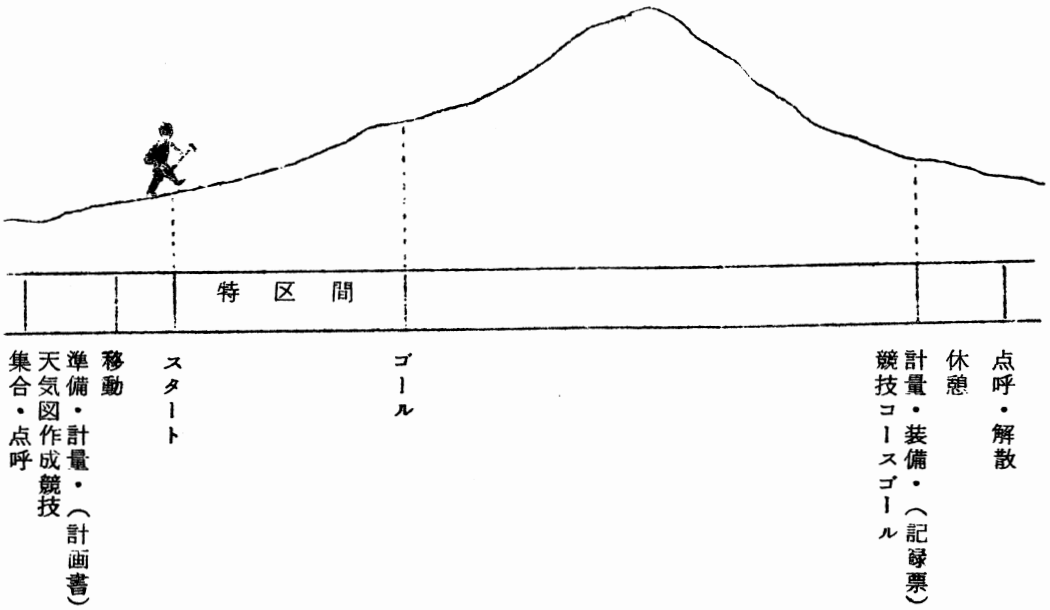
・少年男子、成年女子、少年女子は、４６都道府県を地域によって９つのブロックにわけた夫々のブロック大会で選抜された少年男子１５チーム、成年女子１５チーム、少年女子１６チームが夫々１隊となって競技を行います。

（２）　日程およびコース

種別＼日程		前日	1	2	3	4	5	コース名	種別
成年男子	A隊	監督会議 役員諸会議	開会式 総合開会式	S1	R	T1	表彰式	T1	成年男女
	B隊			T1	S1	R		T2	少年男女
成年女子				R	T1	S1		T3	〃
少年男子				S2	T2	T3		R	成年男女
少年女子				T3	S2	T2		S1	成年男女
								S2	少年男女

（3） 縦走競技とは

山麓、尾根、山頂、峠などを含む山岳の規定の競技場及び競技コースにおいて、規定の負荷重量でチーム単位で縦走し、歩行については特に定めた区間の所要時間を競い、あわせて計画書、記録票、天気図の内容、装備指定品目の有無、全コース制限時間内歩行等を競技する。

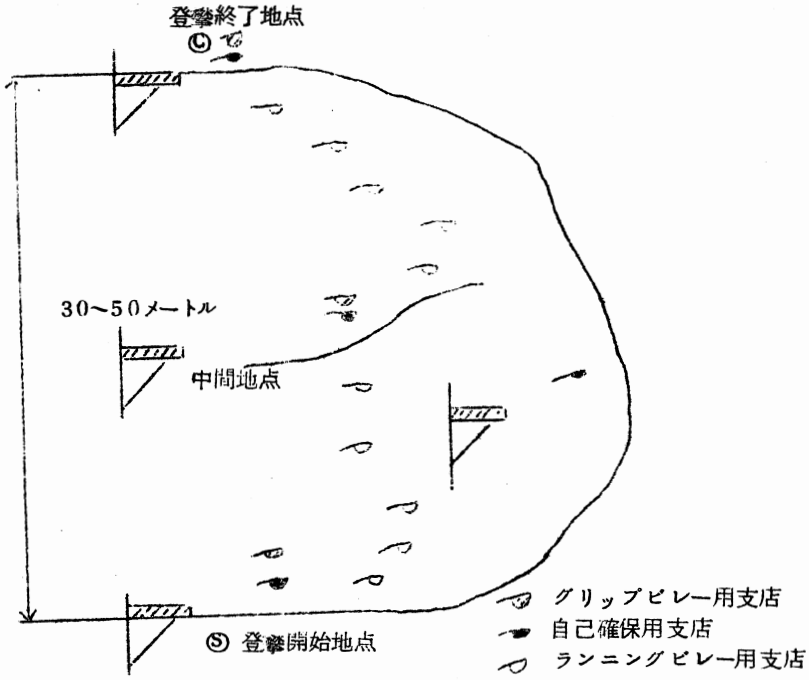


審査基準表

項目番号	項目	中項目	審査内容
1	技術	歩行	地形及び自然条件にあった歩き方（全コース）
		特区歩行	制限時間内の特区歩行
		装備	指定の装備品携行の有無
		計画書又は記録	規定の項目記載の有無
		天気図	天気図の作図力読解力
2	所要時間（50）	特に定めた区間の所要時間	チームの得点計算式 得点係数×（制限時間－チームの所要時間） ○得点係数＝1分についての得点

（４） 登攀競技とは

リッジ、クラック、フェイス、バンド、テラスなどを含む岩壁の競技場において規定のルートを規定の負荷重量でチーム単位で登攀し、その技術の正確さと所要時間を競技する。



登攀は次の順序で行う

順　序	1	2	3	4	5	6
終了地点				Ⓒ	Ⓑ[C]	Ⓐ[B] C
中間地点		Ⓐ	[A] Ⓑ	A [B] ↑	[A] ↑	↑
開始地点	A B C	↑ [B] C	↑ [C]	↑		

＊選手は２名になる可能性あり。

（注） ○印は登攀者、□印は確保者をそれぞれ示す。

審　査　基　準　表

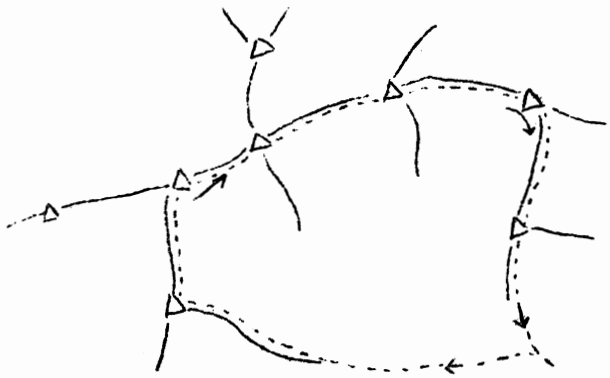
項目番号	項目	中　項　目	審　査　内　容
1	技　術	登　攀	競技中の確保、カラビナ及びザイルの掛け方、技術の正確さ
2	所要時間	登攀開始から終了までの所要時　間	チームの得点計算式 得点係数×（制限時間－チームの所要時間） ○得点係数＝１分についての得点

（５） 踏査競技とは

山麓、尾根、山頂、峠などを含む山岳の規定の競技コースにおいて、規定の負荷重量でチーム単位に踏査し、踏査地図に記入した定点の位置又は踏査したコースの正確さとその所要時間、並びに課題票の解答の正確さを競技する。

※踏査地図に競技コースが指定してあって、実際に踏査して競技コースにある定点を確認し、踏査地図に記入する方法。

②踏査地図に定点が指定してあって、実際に踏査して定点を結ぶ競技コースを確認し、踏査地図に記入する方法の場合。



審　査　基　準　表

項目番号	項目	中項目	審査内容
1	踏査	定点又はコースの確認	踏査して所定の地図に記入した定点又はコースなどの正確さ
		観察	競技場存びその周辺の地形、自然など登山に関する課題について解答の正確さ、及び指定項目の記録の有無
2	所要時間	踏査開始から踏査終了までの所要時間	チームの得点計算式 得点係数×（制限時間－チームの所要時間） ○得点係数＝１分についての得点

他山岳会の会報（受贈分）

3月号　青嶺

4月号　北山、京都山岳、近畿山行、比良山岳、木雞、山友、歩渉譜、趣味の登山

京都府山岳連盟役員改選について

62年4月は山岳連盟の役員改選時期であり、所属山岳団体から選出の理事なども再登録します。当山岳部においては去る61年4月に役員改選で下記のように選出されています。

理事　鷲見敏一（常任国体委員）、大倉寛治郎　　評議員　井戸澄夫

国体委員　吉田　武　　遭難救助隊員　吉田　武、大倉寛治郎、岡本義弘

自然保護委員　近藤　薫、坂井久光、武田喜久郎

従って引き続き62年度も上記のメンバーを山岳連盟役員として登録します。

訂　正

部報　№414　'87　4月号

〔第1622回例会〕のタイトルは「再び判官堂尾根へ」の誤まりでした。

同本文の3行目「…この1月2日…」は「…この1月、2月…」の誤まりでした。

ガラガラ蛇に注意

北山クラブ会報「北山」（№354）によれば、同会の坂田謹爾さんが昨年11月、福井、滋賀県境の大浦越の峠付近で、薄茶色の肌に六文銭のような白い模様、尻尾の先がひしゃげている蛇を目撃された。蛇は鎌首をもたげ、どくろを巻き、尻尾を立て、その先端を震わし、カシャカシャとアルミ箔を打ち振るような音をさせていたそうである。また同会の金久千津子さんも京都・福井の府県境の知井坂付近で同様の蛇に遭遇されている。

金久さんの調べで蛇は北米産の「ガラガラ蛇」と判明したそうである。誰かが外国から持ち帰ったものの処理に困り捨てたものと思われるが、マムシより強い毒性があるということですのでその方面の山へ行かれる方はくれぐれも注意して下さい。

京都府山岳連盟通常総会

4月19日（日）に伝統産業会館で行われました。

京交から、近藤（参与）、　坂井（参与）、　鷲見（常任理事）、　大倉（理事）が出席しました。

退　部

OB　南口 雪男　　横大路　進藤　義治

部　員

昭和６２年４月３０日現在
１２７名

ＯＢ部員

近藤　薫
森下　村重
伊藤　潤治
中村　維源
牧　定夫
田中　定勝
山村　敏郎
畑　照人
石田　和男
山下　周道
坂井　久光
奥村　弘信
河村　清
北林　修一
松岡伊太郎
塩野昭三郎
津田　実
笈田　昭
上原　昭二
横井　褒二
上田　隆
谷尾嘉津子
渡辺　朋子
村　宗松
辻　久雄
今井勇一郎
大伴　初代

本　局

三浦　貞義
渡辺　智生
長谷川雅也
宮川　勇
山田　富男
足立　公弘
田中　明
木下　嘉造
平野　裕
前田　文男
関本　俊雄
山元　誠一
大切　照男
方山　宗子
大槻　雅弘
佐々木敏雄
佐伯　康介
三橋　勉
沢井　佳三
川原　傳治
原田加津子
樋口由希子
上島　弘子
薮田　民栄
鷲見　敏一
立花　雅彦
加地　卓男
楠　とし子
若山　裕孝
松浦　伸吾
広瀬光太郎
鎌田　利雄
上村　次男
竹田　勉
大木　秀実
岡本　孝
大杉　雅晴
猪飼　康夫
柳田　晃
井上　一夫
松井　郁夫
古市　昌造
井戸　澄夫
角田　敏昭
山口　雅直

高　速

岡田　茂久
出海　洋三
石田　幸次
河合　秀晃
大沢　泰
田村　忠司
大倉寛治郎
篠田　勝美
今井　武夫
中島　孝生
矢野　聡
広瀬　烈
高窪　暉夫
中村富美夫

九　条

和田　良一
村野　忠雄
清水　明
大槻　貞従
上島　和彦
森塚　良郎

西賀茂

飯原　京二
横田　義一

醍　醐

岡本　勇
北川　晃

梅　津

蛭子野俊雄
吉田　武
徳田　真三
入江健治郎

横大路

岡本　義弘

五　条

世古口了以
歌川　孝
平田　嘉輝
牧野　健

錦　林

田中　忠久
生田　敏雄
徳野　治
竹村　芳広

烏　丸

坂田　利春
台川　敦美
片岡　秀明
石田　弘
井上　豊
伊地知文男
森本　清一
加藤　満生
上田　嘉夫
戸倉庄之助
久保　忠三

洛　西

武田喜久郎
竹井　章
田中　繁行

市役所

原　勝治
中山　忠之
木原　滋
荒田又之助

帆　布・濾　布
テント・シート
雨　合　羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL　801−5331(代)
西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL　321−0251

愛されるスポーツ店

京菱運動具店

本　店　下京区大宮通松原上ル
TEL（801）1331
十条店　南区竹田街道十条上ル東側
TEL（691）8041
伏見区　伏見区伯耆町西友ストアー4F
TEL（623）0824
山科店　山科区音羽野田町1番
西友ストアー山科店
TEL（592)9770 内線 228

営業時間　**一年中、山用品だけのプロショップ**

午前10〜午後1時と午後3時〜午後8時
（午後1時〜3時は閉店させて頂きます）
<定休日>　火・水曜日

山・アウトドア　プロショップ

ログケビン

LOG CABIN

京都市中京区御幸町通
蛸薬師南入
（四条河原町・阪急河原町より徒歩約4分）

建設省国土地理院発行地図販売特約代理店

あらゆる地図のご用命は

株式会社
小林地図専門店

600　京都市下京区烏丸通六条下ル
TEL 075(351) 6598(代)
地下鉄：烏丸五条　6番出口南50m
市バス：烏丸六条下車

昭和62年5月1日

京都市中京区壬生坊城町48
京都市交通局内
京交山岳部

お　知　ら　せ

今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い一時立退きと相成りました
改築期間中（約１年間）は、本店２階にチロルコーナーとして継続営業いたします

チロル

移転先　本店２階
京都市中京区西ノ京円町２４
ダイヤ運動用品株式会社

HORIKE KYOTO　まかせて下さい…ネ
山とスキー

☆在庫豊富にとり揃えています。
☆山の道具は　ゼヒ　御相談下さい

山とスキー専門店
ビッグ　ホリケ

河原町店　上・河原町通丸太町東入
TEL　222−0363

御婚礼
御引越
ぎおん菊水　専門

ぎおん菊水運送株式会社
山科配車センター
京都市山科区西野山階町１２−１２
TEL（075）581−3101
本　社
東山区大和大路四条下ル　541−2345
夷川営業所
中京区室町二条上ル　256−3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター
厚生会指定
サンコークラフト
西島輝雄
左・川端丸太町下る下堤町８８
TEL（075）771−3442

HIKE & CAMP
この用具の事ならコニシが一番です！
御来店ありがとうございます
山とスキー　レジャー　スポーツ　ショップ
そして
海のコニシ
中・二条通河原町西　TEL 231−1202